東海地方における近世密教系仏堂の外陣架構について

DESIGN AND CONSTRUCTION OF BEAM SYSTEM IN "GEJIN" OF THE BUDDHIST HALLS OF THE ESOTERIC BUDDHIST TEMPLE IN TOKAI DISTRICT IN THE EDO PERIOD

岩田 敏也*
Toshiya IWATA

The aim of this research is to clarify the characteristic of the design and construction of beam system in the main halls of the Esoteric Buddhist temple in TŌKAI district in the Edo period. The conclusions are as follows.

- 1) There are some common distinctions of the beam system in "Gejin" (the outer chamber) of the Buddhist halls in this district in the Edo period, by which these Buddhist halls can be classified.
- 2) Some Buddhist halls adopted the Rainbow-beam of 3-pillar spans in the lengthwise direction of it, especially in the eastern part of MIKAWA and TŌTOUMI areas.
- 3) These beam systems has developed still more in the Edo period, inheriting technical skills from the Medieval period. It has become more complicated with gigantic beams in structure.

Keywords : Edo period, Esoteric Buddhist temple, Buddhist hall, Gejin, Beam system,
江戸時代、密教寺院、仏堂、外陣、架構

1. はじめに

密教寺院の仏堂は、中世に外陣と内陣を区画しながら奥行の深い平面を成立させ、それに伴って、堂内の架構も新たな進展をみせた。特に礼拝空間である外陣の架構は、構造的にも意匠的にも、目覚しい発展を遂げたことはよく知られている¹⁾。近世における密教系の仏堂もそれを継承していると考えられているが、その実態は未だ究明されたとはいえない²⁾。

筆者はこれまで、近世密教系仏堂の架構について、『尾張・美濃地方における近世密教系仏堂の架構について』・『松阪市・朝田寺本堂について』・『茨城県の近世密教系仏堂について』・『新潟県の近世密教系仏堂について』・『岡山県の密教系仏堂について』・『近世密教系仏堂の架構意匠の研究 - 豊川市・財賀寺本堂について - 』・『近世密教系仏堂の架構意匠の研究 - 尾張の笠置寺本堂について - 』・『四国・松山市の蓮華寺本堂と浄瑠璃寺本堂の外陣架構について』等³⁾を発表し、近世密教系仏堂の架構には、中世の伝統を引き継ぎながらも、建築的な発展や地域的な特色がみられることを論じてきた。中でも東海地方の遺構には、注目される点が多く見られたので、この地域の近世密教系仏堂の架構について再調査を行った⁴⁾。その結果、新たな知見を得ることができたので、本稿では、東海地方の遺構（七間堂と五間堂）の外陣架構を中心に考察し、近世密教系仏堂

の特徴の一端を明らかにしたい。なお、七間堂と五間堂を研究対象としたのは、この規模の堂が、中世・近世を通じて密教寺院の主要堂宇とされてきたからである⁵⁾。更に、密教仏堂と類似の架構形式をもつ堂宇が、他宗⁶⁾にもあったので、本稿ではこれらも加えて「密教系仏堂」として検討することとした。

2. 東海地方における近世密教系仏堂の遺構

本稿では、遠江・三河・尾張・美濃・伊勢の地域を対象とし、この地方に残る近世の密教系仏堂として、表-1に示す26棟の遺構を取り上げる。

各仏堂の建立年代をみると、桃山期の遺構が1棟、江戸時代の遺構では、17世紀前半のもの2棟、17世紀後半のもの6棟、18世紀前半のもの8棟、18世紀後半のもの6棟、19世紀前半のもの3棟と、江戸初期から後期に亘って広く残されており、この種の仏堂が近世を通じて継続的に建立されていたとみられる。宗派別では、真言宗の仏堂が14棟、天台宗が6棟あり、密教以外で取り上げたものは、臨済宗と日蓮宗が各2棟、曹洞宗と浄土宗が各1棟である。このうち臨済宗の2ヶ寺は、古くは真言宗であった。次に各仏堂の規模をみると、七間堂は26棟中2棟のみで、他は全て五間堂である。また、遺構は当地域内に広く分布しており、中でも東三河から

* 愛知工業大学工学部建築学科 大学院生・工修

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Aichi Institute of Technology, M. Eng.

遠江地域には比較的良好に残っていて、全国的にも近世密教系仏堂の遺構が多い地方であるとみられる。

表 - 1 東海地方の近世密教系仏堂一覧 (建立年代順)

寺院・建物名	建 立 年 次	宗 派	規 模	所 在 地
金剛證寺本堂 重文	慶長 15 年(1610) 棟札	臨濟 ⁷⁾	7 間×6 間	三重県伊勢市
実成寺本堂	江戸時代初期	日蓮 ⁸⁾	5 間×6 間	愛知県菟目寺
応賀寺薬師堂 県文	寛永 18 年(1641)	真言	5 間×5 間	静岡県新居町
観福寺本堂	寛文 5 年(1665) 棟札	天台	5 間×5 間	愛知県東海市
法明寺薬師堂	寛文 7 年(1667) 棟札	天台	5 間×5 間	岐阜県瑞浪市
横蔵寺本堂 県文	寛文 10 年(1670) 寺記	天台	5 間×5 間	岐阜県谷汲村
日龍峯寺本堂	延宝 2 年(1674) 寺記	真言	5 間×4 間	岐阜県武儀町
普門寺本堂	元禄 6 年(1693) 棟札	真言	5 間×5 間	愛知県豊橋市
地藏院本堂 重文	元禄 13 年(1700) 棟札	真言	5 間×4 間	三重県関町
甲山寺護摩堂	元禄 16 年(1703) 寺記	天台	5 間×5 間	愛知県岡崎市
大福寺本堂	宝永 4 年(1707) 寺記	真言	5 間×5 間	静岡県三ヶ日
東観音寺観音堂	宝永 7 年(1710) 棟札	臨濟 ⁹⁾	5 間×4 間	愛知県豊橋市
西楽寺本堂 県文	18 世紀前半頃	真言	5 間×5 間	静岡県袋井市
三明寺本堂 県文	正徳 2 年(1712) 棟札	曹洞 ¹⁰⁾	5 間×5 間	愛知県豊川市
油山寺薬師堂 県文	元文 4 年(1739) 棟札	真言	5 間×5 間	静岡県袋井市
鴨江寺本堂	18 世紀前半頃	真言	5 間×6 間	静岡県浜松市
妙立寺本堂	延享 4 年(1747) 寺記	日蓮 ¹¹⁾	5 間×5 間	静岡県湖西市
大御堂寺本堂	宝暦 4 年(1754) 棟札	真言	5 間×5 間	愛知県美浜町
笠置寺本堂	宝暦 13 年(1763) 寺記	真言	7 間×7 間	愛知県名古屋
摩訶耶寺本堂	18 世紀後半頃	真言	5 間×5 間	静岡県三ヶ日
富賀寺本堂	寛政 5 年(1793) 寺記	真言	5 間×5 間	愛知県新城市
真福寺本堂	寛政 5 年(1793) 寺記	天台	5 間×7 間	愛知県岡崎市
長久寺本堂	寛政 7 年(1795) 寺記	真言	5 間×5 間	愛知県名古屋
財賀寺本堂	文政 6 年(1823) 棟札	真言	5 間×5 間	愛知県豊川市
願成寺薬師堂	天保 2 年(1831) 寺記	天台	5 間×5 間	愛知県名古屋
曼陀羅寺曼陀羅堂	弘化(1844-47) 頃	浄土 ¹²⁾	5 間×5 間	愛知県江南市

3. 架構及び平面による分類

中世の密教仏堂は、外陣と内陣、そして脇陣・後陣などから成る正方形に近い平面をもち、各室の規模や構成、架構等において多様な発展を示した。とりわけ外陣に関しては、その傾向が顕著であり、それまでの和様に大仏様・禅宗様の手法を加え、入側柱を省略しながら虹梁を渡し、架構を空間構成や意匠に用いる進展をみせた。そして、外陣の拡張化・荘厳化の動きが進み、虹梁・墓股・大瓶束・海老虹梁、斗拱や天井形式など、装飾的技法を巧みに組み合わせ、各地に斬新で多彩な意匠の仏堂が建立されたことは周知の通りである¹³⁾。

そこで本稿では、架構形式・入側柱の数・天井形式・外陣奥行の4項目について各仏堂の形態分類を試み、以下この分類(表-2)に従って、その特色を探ってみた。

表 - 2 外陣の架構及び平面構成による分類表

分類記号	入側柱	外 陣 架 構	外 陣 天 井 形 式	奥行	遺 構 名
A	2 本	桁行 3 間大虹梁	庇:化粧 身舎:鏡又は格天井	2 間	応賀寺薬師堂・普門寺本堂・西楽寺本堂・油山寺薬師堂 鴨江寺本堂・摩訶耶寺本堂・財賀寺本堂
B-1	なし	梁行 2 間虹梁+桁行 3 間大虹梁	庇:化粧 身舎:鏡又は格天井	2 間	日龍峯寺本堂・三明寺本堂・妙立寺本堂・富賀寺本堂
B-2	なし	梁行 2 間虹梁	庇:化粧 身舎:鏡又は格天井 又は小組格天井	2 間	金剛證寺本堂・実成寺本堂・観福寺本堂・横蔵寺本堂 大御堂寺本堂
B-2'	なし	梁行 2 間虹梁	舟底天井	2 間	法明寺薬師堂・真福寺本堂
C	なし	梁行 3 間虹梁	庇:化粧 身舎:格天井	3 間	笠置寺本堂
D	4 本	見せない	庇:格天井 身舎:小組格天井	2 間	大福寺本堂
E	なし	見せない	一面 格天井	2 間	甲山寺護摩堂・東観音寺観音堂・願成寺本堂
F	なし	見せない	一面 鏡又は格天井	1 間	地藏院本堂・長久寺本堂・曼陀羅寺曼陀羅堂

(1) 外陣に架構を見せる仏堂

A: 外陣奥行 2 間で入側隅柱のみ立て、桁行 3 間大虹梁を用いる堂

これに分類される遺構は 7 棟あり、いずれも地域的には東三河から遠江に分布し、時代的には江戸初期から後期に亘ってみられる。

このうち最も建立年代の古い応賀寺薬師堂(写真-1)¹⁴⁾は、外陣に入側隅柱 2 本を立て、同柱間の頭貫位置に桁行 3 間の大虹梁を渡している。虹梁上には直接平三斗を載せ、外陣前面の側柱上斗拱(出三斗)との間を海老虹梁で繋ぎ、内陣正面の両端柱と入側隅柱の間には頭貫・台輪を渡して身舎を固め、入側隅柱から外陣の正面側面 2 方の側柱に向けて水平の繋虹梁を入れる。天井は庇部分を化粧屋根裏、身舎部分を鏡天井とする。

普門寺本堂(図-1)・西楽寺本堂(写真-2)・油山寺薬師堂(図-2)の 3 棟の外陣も、応賀寺薬師堂と同様、入側隅柱を 2 本立て、この間に桁行 3 間虹梁を渡す架構を示すが、普門寺と西楽寺では桁行 3 間虹梁上に台輪を載せ、その上に斗拱を置く。更に、西楽寺と油山寺では入側隅柱と内陣正面柱との間に梁行 1 間の内法虹梁を架け、上部の頭貫とこの虹梁間の中備に墓股を入れる。また、3 棟とも入側隅柱から外陣正面側面 2 方の側柱へ海老虹梁を渡しており、応賀寺の外陣架構よりも装飾的な扱いが増している。

鴨江寺本堂(写真-3)の外陣では、桁行 3 間の大振りな虹梁を入側隅柱間の内法位置に架け、柱頂には頭貫・台輪が通され、頭貫と桁行 3 間虹梁間には中央に墓股、その両脇(正面側柱筋位置)には大瓶束が置かれる。また、入側隅柱から側面側柱と内陣正面の柱へも内法虹梁が架かり、更に海老虹梁が入側隅柱上の斗拱から外陣の正面側面 2 方の側柱と、桁行 3 間虹梁上の大瓶束上斗拱から外陣正面側柱へ渡される。

摩訶耶寺本堂(図-3・写真-4)は、外陣側面の柱間寸法を大きくとり、更に入側柱の位置を側面側柱とずらして立てている。入側隅柱間には、頭貫位置に桁行 3 間虹梁と台輪を渡しているが、庇の幅が比較的狭いことと、側面の柱筋が合わないこともあって、身舎から側柱への繋虹梁は一切用いていない。また、天井は身舎部分を格天井とし、庇部分では身舎との高低差を支輪で処理した折上格天井としている。この堂の外陣では、桁行 3 間虹梁を使用しながらも、海老虹梁を用いない点と、庇部分に化粧屋根裏を見せない点に特色がある。

財賀寺本堂(図-4・写真-5)は江戸時代後期の大型五間堂で、やはり外陣奥行の柱間寸法を大きくとり、側面では前庭間の垂木枝数を 20 枝、第 2 間を 23 枝とする。外陣前面では、中央の柱間枝数を 32 枝、その両脇間を 17 枝、両端間を 18 枝とし、中央柱間を殊更広くとる。これに対し、外陣内の入側隅柱は、同柱間の垂木枝数

を64枝とし、内陣正面3間の見付幅と一致させ、しかも化粧隅木が真隅に納まるように、桁行・梁行とも側柱までの垂木枝数が19枝となる位置に立っている。このように財賀寺では外陣の前面と側面の側柱を入側隅柱位置と無関係に配した点に特徴がある。

外陣の架構については、鴨江寺と同様、入側隅柱間の内法位置に巨大な桁行3間虹梁を渡し、上に大瓶束を置いて頭貫・台輪を通し、その上に8枝間隔で出組の詰組を載せる。また入側隅柱から内陣正面両端の柱へ、梁行1間の内法虹梁・頭貫・台輪を渡して身舎を固める。天井は底を化粧屋根裏、身舎を格天井とする。財賀寺の外陣では、身舎と底の繋ぎに海老虹梁が一切使われず、入側隅柱間の内法に架けられた桁行3間虹梁の巨大さが目立ち、柱の配置法なども合わせ、時代の新しさが認められる。

B：外陣に入側柱を立てず、架構を見せる堂

Bに分類されるのは、11棟の遺構である。これを外陣架構の特徴によって更に細分すると、Aでもみられた桁行3間の大虹梁を用いる架構法を採る堂が存在するので、これをB-1とし、桁行3間虹梁を使わないものをB-2とした。またB-2のうち、外陣全体を寄棟型の舟底天井とするものがあり、これをB-2'とした。

B-1：入側柱を立てず、梁行2間虹梁と桁行3間虹梁を併用する堂

この分類の堂は、奥行2間の外陣内に入側柱を1本も立てず、内陣正面の両端身舎柱から外陣前面側柱へ梁行2間虹梁を架け、この2挺の虹梁上の化粧隅木が真隅に納まる位置に支点を設け、この支点間に桁行3間の大虹梁を渡す架構法を採るものであり、4棟の遺構がこれに属する。

日龍峯寺本堂(写真-6)は懸崖に建つ懸造りの堂で、外陣内の2挺の梁行2間虹梁上に板葭股と三斗組を載せて支点とし、この間に桁行3間の大虹梁を渡す。また、この虹梁はそのまま前面底部分の化粧屋根裏天井の垂木を受け、虹梁より奥の身舎部分には鏡天井を張る。建立年次が4棟中、最も古いこともあつてか、入側桁をそのまま桁行3間虹梁としたもので、過飾に陥ることなく、簡潔な外陣である。

三明寺本堂(図-5・写真-7)の外陣では、内陣正面の両端身舎柱から外陣前面側柱へ梁行2間の虹梁を架け、この虹梁上中央(化粧隅木が真隅に納まる位置)に大瓶束を立てる。この大瓶束頂を桁行3間虹梁と台輪で繋ぎ、台輪上には各側柱筋位置に出組斗拱を置く。大瓶束からは、外陣側柱へ向けて桁行・梁行・隅行の3方向へ海老虹梁を架ける。また、桁行3間虹梁から外陣前面中央の側柱へ

向けても海老虹梁が渡され、外陣底部分には都合8挺の海老虹梁が架けられる。この他、内陣正面の中央2本の柱から桁行3間虹梁上の斗拱へも梁行1間の虹梁を渡し、この虹梁上中央に撥束を置いて天井廻縁を受け、外陣身舎部分を3分して格天井を張り、正側3方の底部分は化粧屋根裏とする。ここでは、梁行2間虹梁・桁行3間虹梁・海老虹梁を三段に組上げた複雑な架構が特徴である。

妙立寺本堂(図-6・写真-8)と富賀寺本堂(図-7・写真-9)の外陣でも、内陣正面の両端身舎柱から外陣前面側柱へ梁行2間の虹梁を架け、この虹梁上中央に大瓶束を立てる。この大瓶束間に、妙立寺では内法位置に、富賀寺では頭貫位置に、それぞれ桁行3間虹梁を渡し、前者では桁行3間虹梁上の3分点にも大瓶束を立て、東頂に頭貫を通してその上に台輪を置く。後者では桁行3間虹梁上に直接台輪を置く。身舎と底の繋ぎには、妙立寺では梁行2間虹梁上の大瓶束から外陣の正面側面2方の側柱へ、更に桁行3間虹梁上の大瓶束から正面側柱へそれぞれ海老虹梁を架ける。富賀寺では梁行2間虹梁上の大瓶束から梁行・桁行・隅行の3方へ水平虹梁を渡し、桁行3間虹梁上の斗拱から外陣前面側柱へは海老虹梁を架ける。天井は底部分を両堂とも化粧屋根裏、身舎部分は妙立寺が格天井、富賀寺が小組格天井とする。

日龍峯寺本堂以外は、東三河・遠江の遺構であり、梁行2間虹梁・桁行3間虹梁・海老虹梁を三段に組上げる架構を見せる点に共通の特色がある。

以上、AとB-1に分類された遺構11棟の外陣架構の概要を述べたのであるが、このうち10棟が東三河・遠江の遺構であり、当地域では、外陣に桁行3間の大虹梁を用いる架構法が一般的であった。しかも、このような架構法は、他の地方の近世密教系仏堂には類例¹⁵⁾が少なく、当地方における地域的な特色の一つであるといえよう¹⁶⁾。

中世仏堂で、桁行3間虹梁を用いた先駆的遺構としては、善水寺本堂(滋賀県甲西町：室町前期)¹⁷⁾など数棟が知られている。善水寺本堂は桁行7間×梁間5間の仏堂で、外陣奥行を2間とし、入側柱列の中央2本の柱を抜き、この間の頭貫位置に桁行3間の虹梁を渡すもので、Aの分類でみられた架構法の先例といえよう。また、当地方においては、岐阜県関市の新長谷寺本堂(写真-19)(長禄4年/1460)¹⁸⁾が、外陣に桁行3間の虹梁を採用している。新長谷寺本堂は桁行・梁間ともに5間の仏堂で、奥行2間の外陣内には入側柱を1本も立てず、内陣正面両端の身舎柱から外陣前面側柱へ梁行2間の虹梁を架け、その上に板葭股と三斗組を置いて、この間に

写真-1 応賀寺薬師堂外陣

写真-2 西条寺本堂外陣

写真-3 鴨江寺本堂外陣

写真-4 摩訶耶寺本堂外陣

写真-5 財賀寺本堂外陣

写真-6 日龍峯寺本堂外陣

写真-7 三明寺本堂外陣

写真-8 妙立寺本堂外陣

写真-9 富賀寺本堂外陣

写真-10 金剛證寺本堂外陣

写真-11 実成寺本堂外陣

写真-12 横蔵寺本堂外陣

図-1 普門寺本堂平面図

図-2 油山寺薬師堂平面図

図-3 摩訶耶寺本堂平面図

図-4 財賀寺本堂平面図

図-5 三明寺本堂平面図

写真-13 大御堂寺本堂外陣

写真-14 法明寺薬師堂外陣

写真-15 真福寺本堂外陣

写真-16 大福寺本堂外陣

写真-17 東観音寺観音堂外陣

写真-18 地藏院本堂外陣

図-6 妙立寺本堂平面図

図-7 富賀寺本堂平面図

図-8 観福寺本堂平面図

図-9 笠覆寺本堂平面図

図-10 大福寺本堂平面図

[写真-1・写真-10・写真-19は、修理工事報告書より転載]
* 平面図脇の数字は各柱間の枝数を、()内の数字は総長[cm]を示す。
また、図中の点線は虹梁の架かる位置を表わす。

桁行3間虹梁を渡す架構法で、B-1の形式と一致し、しかもこの虹梁が直接、前方庇部分の化粧垂木を受けており、先述の日龍峯寺と同様の古式な手法を採っている。

桁行3間大虹梁を用いる仏堂が集中してみられた東三河から遠江地域においても、その先駆けとなったと考えられる遺構が存在する。静岡県湖西市の本興寺本堂(写真-20)(天文21年/1552)は、法華宗の仏堂であるが、この堂の外陣も桁行5間×梁間2間で、入側柱を立てず、内陣正面両端の身舎柱から外陣前面側柱へ梁行2間虹梁を架け、この2挺の虹梁上に三斗組を載せて

写真-19 新長谷寺本堂外陣

写真-20 本興寺本堂外陣

支点を設ける。ただし、ここではこの支点間に桁行3間虹梁ではなく、単純な桁行3間の入側桁を渡して、直接庇の化粧垂木を受けている。更に、三斗からは外陣側面の側柱上斗拱へ海老虹梁を渡している。このように本興寺本堂の外陣では、未だ桁行3間の虹梁は使われていないものの、この架構が周辺の近世仏堂における外陣架構の発展に少なからぬ影響を及ぼしたことは十分に考えられよう。

こうしてみると桁行3間大虹梁は、当初、入側隅柱間に通された頭貫であったり、梁行2間虹梁上の支点間に渡された入側桁であったものが、次第に虹梁へと変化していった可能性がある。そして、これを内法に使用するようになり、虹梁上に蓐股や大瓶束・海老虹梁・詰組を配したり、虹梁自体を大型化するなどの架構意匠の発展を示した。また、禅宗様の影響は初期の遺構にもみられるので、中世禅宗仏殿で既に用いられていた虹梁・大瓶束を使って柱を抜く手法を密教系の仏堂にも応用し、桁行3間虹梁の架構が発生した可能性も考えられるが、その起源の究明は今後の課題としたい。

B-2: 外陣奥行2間で入側柱を立てず、梁行2間の虹梁を用いる堂

この種の堂は5棟あり、26棟中最も建立年次の古い金剛證寺本堂を始め、4棟が17世紀中期までの遺構である。また、その所在地は、伊勢1棟・美濃1棟・尾張3棟で、三河・遠江を除く地域に限られている。

金剛證寺本堂(写真-10)¹⁹⁾は、桁行7間×梁間6間の七間堂で、前方の梁間2間を外陣とする。外陣内には入側柱を1本も立てず、内陣正面の各柱から外陣前面の側柱へ梁行2間虹梁を架け、この6挺の虹梁上の中央に大瓶束と平三斗(拳鼻付)を置いて入側桁を受ける。また、両端の梁行2間虹梁の中央から外陣前面側柱へ、桁行と隅行の繋虹梁を架ける。天井は内陣前の5間×1間の身舎部分を鏡天井、その正側3方の底部分を化粧屋根裏とする。

実成寺本堂(写真-11)は五間堂で、内陣見付を3間とし、内陣正面の両端柱から外陣前面の側柱へ梁行2間虹梁を架け、この2挺の虹梁上の化粧隅木が真隅に納まる位置に大瓶束を立て、三斗拵肘木を載せて入側桁を受ける架構をみせる。また、側柱上の斗拱には手挟を用い、天井は身舎部分を格天井、底部分を吹寄せ垂木(後補の可能性ある)の化粧屋根裏とする。架構は、先述の日龍峯寺本堂の外陣とほぼ共通するが、入側桁(垂木掛)を虹梁としていない点は古式で、本興寺本堂と一致する。

観福寺本堂(図-8)・横蔵寺本堂(写真-12)・大御堂寺本堂(写真-13)の外陣ではいずれも、内陣正面の4本の柱から外陣前面側柱へそれぞれ梁行2間の虹梁を架け、この虹梁上の化粧隅木が真隅に納まる位置に観福寺と大御堂寺では平三斗、横蔵寺では底側に出三斗、身舎側に出組を載せて入側桁を受ける。天井は観福寺と大御堂寺が身舎部分を格天井、横蔵寺が小組格天井とし、底部分は3棟とも化粧屋根裏とする。このように、外陣に梁行2間虹梁を4挺渡し、この上に入側桁を置く架構法は、中世仏堂(五間堂)では最も一般的な手法であり、当地方でも滝山寺本堂(愛知県岡崎市:室町前期)²⁰⁾と高田寺本堂(愛知県師勝町:室町中期)²¹⁾にみられる。

B-2': 外陣奥行2間で入側柱を立てず、梁行2間の虹梁を用い、外陣全体を舟底天井とする堂

この分類の遺構は、法明寺薬師堂(写真-14)と真福寺本堂(写真-15)の2棟であり、両堂とも外陣の架構法は、内陣正面の4本の柱から外陣前面側柱へそれぞれ梁行2間の虹梁を架ける点でB-2の堂と共通する。しかし、虹梁上の中央に法明寺では彫刻蓐股と三斗拵肘木、真福寺では大柄な板蓐股と大斗肘木を置き、その上に化粧棟木を通して外陣全体を寄棟型の舟底天井としている。中世においても、外陣天井を舟底天井とする遺構²²⁾は存在するが、その数は少なく、このような礼堂風で復古的ともいえる構成の仏堂が、当地方の近世仏堂においても採用されていたことは注目されよう。

C: 外陣奥行3間で入側柱を立てず、梁行3間の虹梁を用いる堂

これに分類されるのは、笠覆寺本堂(図-9)1棟である。この堂は桁行7間×梁間7間の七間仏堂であり、前方の7間×3間を外陣とし、外陣内には柱を1本も立てていない²³⁾ので、広々とした礼拝空間を有する。外陣の架構は、内陣正面の6本の柱から外陣前面の側柱へそれぞれ梁行3間の虹梁を渡し、この6挺の虹梁のうち左右両端の虹梁上には側面側柱筋位置にそれぞれ平三斗を置き、前寄りの平三斗で化粧隅木と入側通りの垂木掛を受ける。また、これらの各斗拱から外陣側面の側柱上の斗拱へ海老虹梁を架ける。天井は内陣前の5間×2間の身舎部分を格天井とし、その正側3方の底部分を化粧屋根裏とする。

外陣奥行3間で、梁行3間虹梁を用いた中世仏堂としては、長弓寺本堂(奈良県生駒市:弘安2年/1279)²⁴⁾があげられる。この堂では外陣中央に梁行3間虹梁を渡し、この2挺の虹梁下に入側柱を支柱として立てている。この柱については、後補の指摘があるものの、少なくとも当初の計画においては3間虹梁によって中央2本の柱を抜き、広々とした外陣を造ろうとした意図が窺える。これ以降、中世仏堂では梁行3間虹梁を使った遺構は存在せず、笠覆寺本堂は近世の遺構ではあるが、同種の手法を採用し、しかも外陣内の柱を全て抜き取るという架構をもった仏堂として注目される。

(2) 外陣に架構を見せない仏堂

D：外陣奥行2間で入側柱4本を立て、架構を見せない堂

この分類に属するものは、大福寺本堂(図-10・写真-16)1棟のみである。この堂は、外陣側面の柱間寸法を広くとり、これとは柱筋をずらして、外陣内に4本の入側柱を立てる。外陣は、内陣前の3間×1間の身舎部分とその3方を取り囲む幅1間の底で構成され、入側柱間には無目数居・頭貫(側面は虹梁)・台輪を通し、柱上に出三斗、中備に葦束(側面は出三斗)を置く。天井は正側3方の底部分を格天井、内陣前の身舎部分を小組(菱格子)格天井とし、天井高を低く抑え、外陣に架構を見せない点や底部分を化粧屋根裏としない点に特色がある。また、中世において既に、入側柱が抜かれていく傾向があることからみると、古風な印象を受けるが、近世までこの伝統が存続したとみられる。

E：外陣奥行2間で入側柱を立てず、架構を見せない堂

これに分類される堂には甲山寺護摩堂・東観音寺観音堂(写真-17)・願成寺本堂の3棟がある。いずれも桁行5間×梁間2間の外陣一面に格天井を張り、虹梁による架構を採用しないことを特徴としている。この種の外陣は中世仏堂²⁵⁾においても存在するが、その数は僅かであり、室町時代以降の例としては、興隆寺本堂(愛媛県丹原町：文中4年/1375)²⁶⁾・西国寺金堂(広島県尾道市：至徳3年/1386)²⁷⁾・観音寺金堂〔復原〕(香川県観音寺市：室町前期)²⁸⁾・不動院本堂(奈良県大和高田市：文明15年/1483)²⁹⁾がある。それぞれ外陣全体に鏡天井・格天井・棹縁天井・格天井を張っており、西国寺と不動院では外陣内に斗拱も用いていない。中世の密教系仏堂の外陣では架構や化粧屋根裏を見せるものが主流であった中で、これらは簡素で穏やかな扱いの外陣であり、甲山寺・東観音寺・願成寺の各堂もこれらの流れを引くものであると思われる。

F：外陣奥行1間で、架構を見せない堂

これに分類されるのは、地藏院本堂(写真-18)³⁰⁾・長久寺本堂・曼陀羅寺曼陀羅堂の3棟である。地藏院本堂は伊勢地方の近世五間仏堂の遺構で、外陣の奥行1間は、他の梁行柱間寸法より大きくとり、架構を見せることなく、外陣一面に鏡天井を張る。長久寺本堂は、来迎柱以外を全て角柱とした簡素な仏堂で、やはり奥行1間の外陣を他の柱間より広くとり、架構は見せず、一面に格天井を張る。曼陀羅寺曼陀羅堂は、浄土宗寺院の仏堂で、外陣前面両端の柱間寸法よりも外陣奥行の柱間を大きくとり、更に内陣正面の入側柱を外陣前面の側柱と柱筋を揃えず、脇陣の見付幅を広くとり、内陣正面も中2本の入側柱を抜いて見付1間としている。天井は小組格天井を一面に張り、架構は見せていない。3棟とも、外陣の隅部分では隅木が真隅に納まらない柱配置を採るが、梁組は全て外陣一面に張られた天井裏に隠して処理している。

中世仏堂でこの種の外陣をもつものとしては、広島県の浄土寺阿弥陀堂(貞和元年/1345)³¹⁾などがあげられるが、その数は少数である。この他、外陣の奥行を1間とする仏堂の中には、和歌山県の長保寺本堂(延慶4年/1311)³²⁾のように、外陣の奥行を広い1間とし、内陣正面の入側柱から外陣前面側柱へ梁行虹梁を渡し、虹梁上の隅木が真隅に納まる位置に支点を設け、内陣前の狭い身舎部分を小天井とし、小天井以外を化粧屋根裏の底とする架構法をもつ堂がある。中世では、和歌山・高知・福井³³⁾に遺構を残すが、東三河の御津町に所在した大恩寺念仏堂³⁴⁾もこの種の架構をもつ中世

仏堂の遺構であった。しかしながら、当地方の近世密教系仏堂の遺構においては、この架構を採用した堂は存在していない。

もう一つ、奥行1間の外陣をもつ仏堂には、正面と両側面の底幅を同寸に揃え、隅木を真隅に納める構成の堂³⁵⁾があるが、この種の堂も当地方の近世密教系仏堂には確認できなかった。

4. 大工・工匠について

最後に外陣の架構と大工・工匠の関係についても若干触れておきたい。今回取り上げた26棟の仏堂のうち、棟札等によって工匠名が知られるものは、金剛證寺本堂【山田下馬所賀兵衛宗廣・山田市木彦兵衛家次】、観福寺本堂【名護屋・大塚弥市良重宅】、地藏院本堂【久住十兵衛・伊藤六右衛門】、東観音寺観音堂【岡田権右衛門義直】、三明寺本堂【岡田善三郎成房】、油山寺薬師堂【邨松邑・兼子忠衛門・山内菊右門・山内権七郎】、大御堂寺本堂【野田彦兵衛清房】、財賀寺本堂【岡田五左衛門之昌】の大工である。

このうち系譜が明らかなのは、岡田姓の大工である。岡田家は代々、五左衛門を名乗る宮大工の家柄で、初代は江州・近江八幡の生まれで、徳川家康に従い三河に移ったという。その後、牛久保(豊川市)に拠点を置き、現13代当主まで、数多くの社寺建築を手掛けてきた。岡田家に残る文書³⁶⁾によると、東観音寺・三明寺・財賀寺以外にも、甲山寺護摩堂が岡田忠重、笠覆寺本堂が岡田富次、摩訶耶寺本堂と富賀寺本堂がともに岡田富次・岡田之昌によるものとされ、岡田大工が携わったとされる遺構は26棟中7棟にのぼる。

三明寺本堂・摩訶耶寺本堂・富賀寺本堂・財賀寺本堂は、東三河・遠江に所在する桁行3間大虹梁を用いた外陣架構を有する仏堂であり、笠覆寺本堂は尾張の遺構ではあるが、梁行3間虹梁を大胆に使った七間堂で、いずれも豪放な架構を見せる点に共通の特徴がある。三河・遠江地方を中心にみられたこの種の外陣架構法には、岡田大工が深く関わり、その発展の一翼を担っていたことが窺え、今後検討を進めたい。

5. むすび

以上、本稿では東海地方に残る近世の七間堂・五間堂の外陣架構の特徴とその変遷について考察し、近世密教系仏堂の特徴の一端を明らかにした。それらを要約すると以下のとおりである。

- ① 東海地方の近世密教系仏堂の五間堂では、外陣の奥行を2間とするものが一般的であった。また、各仏堂の特色は、外陣の架構法に顕著に現われていた。
- ② 当地方における外陣架構の最大の特徴は、桁行3間大虹梁の使用である。この架構には、a) 入側柱を2本立てて、この間に桁行3間虹梁を渡すもの、b) 入側柱を立てず、内陣両脇柱筋に梁行2間虹梁を渡し、この上に桁行3間虹梁を載せるものの2形式があった。更に桁行3間虹梁上や入側隅柱から、正面側面の側柱へ海老虹梁を架ける堂もあり、虹梁を二段・三段に積み重ねた外陣架構を見せる仏堂が多くあった。しかも、これらの架構法は東三河・遠江地域に集中してみられた。
- ③ 桁行3間虹梁の発生要因の一つとして、当初入側筋の天井桁(垂木掛)や頭貫であったものが、次第に装飾を主とした横架材として用いられるようになったことが推察できる。そして、これを内法に用いるようになり、禅宗様の技法等も積極的に取り

入れ、虹梁上に蓼股や大瓶束・海老虹梁・詰組を配したり、虹梁自体を大型化するなど、架構意匠の発展を示した。

- ④ 当地方には、中世にみられた、外陣に梁行 2 間虹梁を 4 挺用いる架構をもつ仏堂や、舟底天井を張った仏堂、入側柱を全て残す仏堂などもあり、古式な手法も存続した。また、外陣に全く梁組を見せず、天井を一面に張った仏堂も少数ながら存在した。
- ⑤ 当地方の近世密教系仏堂では、参拝者の目に触れ易い外陣の架構表現に対する積極的な姿勢が認められた。その背景には、他宗派の近世寺院本堂にみられる丸柱・斗拱・虹梁・彫刻等による荘厳化や、大工・棟梁による独自の建築表現の試みなど、近世建築界の動向が少なからず影響を与えていたと考えられる。

今後は内陣架構や他の地域の遺構等についても考察をすすめ、近世密教系仏堂の特質の解明を進めて行きたい。

謝辞 本稿を纏めるに当たって、調査にご協力いただいた寺院及び関係各位に記して感謝の意を表します。また、始終懇切丁寧なご指導・ご教示を賜りました愛知工業大学工学部：小野木重勝博士並びに杉野丞博士に対し、深く感謝の意を表します。

注

- 中世仏堂に関しては、先学による多大な研究成果がある。代表的なものとしては、伊藤延男博士の『中世和様建築の研究』（彰国社 1961 年）・浅野清博士の『鎌倉時代の仏堂』（佛教藝術五〇 毎日新聞社 1962 年）・『室町時代の仏堂』（佛教藝術六三 毎日新聞社 1966 年）・関口欣也博士の『日本建築史基礎資料集成七・仏堂Ⅳ』（中央公論美術出版 1975 年）・田中淡博士の『中世新様式における構造の改革に関する史的考察』（日本建築の特質 太田博太郎博士還暦記念論文集 岩波書店 1976 年）・鈴木嘉吉博士の『中世の寺院建築（大仏様・和様）』（文化財講座 日本の建築 3 中世Ⅱ 第一法規 1977 年）・『和様建築の成立』（日本美術全集 6・1994 年）・太田博太郎博士の『新和様の建築』（全集日本の古寺 13・1984 年）・永井規男博士の『折衷様の建築』（全集日本の古寺 18・1985 年）・工藤圭章博士の『和様から新和様・折衷様へ』（日本美術全集 10・1991 年）等がある。
- 近世密教系仏堂に関する論考としては、藤井恵介博士の『天台真言系寺院建築』（奈良国立文化財研究所・第一回近世社寺建築研究集会記録 1988 年）・浅川滋男博士の『天台真言系仏堂平面の類型とその地域分布』（奈良国立文化財研究所・第一回近世社寺建築研究集会記録 1988 年）・櫻井敏雄博士の『西国三十三所寺院の構成と本堂の特質』（浅野清編・西国三十三所霊場寺院の総合的研究 中央公論美術出版 1980 年）などがあり、個々の仏堂に関する論考では、『三遠地方における近世密教系仏堂の架構について』（浅野清 日本建築学会大会学術講演梗概集（以下大会梗概集）1980 年）・『近世遺構を通してみた中世仏堂発展の一過程』（山岸常人 大会梗概集 1986 年）・『和歌山県北部の仏堂の外陣架構について』（山岸常人 大会梗概集 1989 年）・『南寿山観音寺本堂』（小野木重勝 大会梗概集 1990 年）・『愛媛県の近世寺院建築』（來木雅之 大会梗概集 1990 年）等がある。しかしながら、近世密教系仏堂に関しては、未だその特質や変遷過程を体系的に論ずるまでには至っていないと考える。
- 拙稿は本文記載順に、大会梗概集 1991 年・大会梗概集 1992 年・東海支部研究報告集 1993 年・大会梗概集 1993 年・東海支部研究報告集 1994 年・大会梗概集 1994 年・大会梗概集 1995 年・大会梗概集 1996 年。
- 東海地方の各遺構に関しては、浅野清博士が『静岡県の近世社寺建築』（静岡県教育委員会 1979 年）・『愛知県の近世社寺建築』（愛知県教育委員会 1980 年）・『岐阜県の近世社寺建築』（岐阜県教育委員会 1980 年）・『三重県の近世社寺建築』（三重県教育委員会 1985 年）の各報告書の中で既に紹介しておられる。更に東三河と遠江の遺構を取り上げ、『三遠地方における近世密教系仏堂の架構について』（大会梗概集 1980 年）で、その特徴について論じておられる。本稿では、対象範囲を広げ、東海地方の七間堂・五間堂という括りでまとめ、各遺構の外陣架構を中心に考察を行った。また、その後（1980 年以降）各都道府県で刊行された近世社寺建築調査報告書に記載された遺構も含め、全国的な視野での比較検討を試みた。特に桁行 3 間虹梁を用いた遺構（注 15）に関しては、他の地域についても可能な限り実測調査を行った。
- 本稿で三間堂を取り上げていないのは、三間堂は規模も小さく、また、外陣をもたず堂内を一室とするものや、天井を張って架構を見せないも

- のが多いため、外陣の架構法を考察する場合、七間堂・五間堂の架構と三間堂の架構を単純に比較することは適切でないと考えたからでもある。
- 本稿では天台・真言宗以外に、日蓮宗 2 棟・臨済宗 2 棟・曹洞宗 1 棟・浄土宗 1 棟の仏堂を取り上げた。表 1 参照。
 - 金剛證寺は、9 世紀に空海が真言道場を開いたと伝える古刹で、室町初期に中興され、臨済宗に改められた。
 - 実成寺は、元応元年(1319)の創立で、その後、日妙上人が現在の日蓮宗に改宗したと伝える。
 - 東観音寺は、古くは真言宗に属し、永禄年間(1558・1569)に臨済宗に改めたといい、境内には重要文化財の多宝塔（大永 8 年頃）も残る。
 - 三明寺は、奈良時代の創建と伝え、旧宗派は不明であるが、室町時代に中興されて曹洞宗になったといい、三重塔（享禄 4 年）と本堂内宮殿（天文 23 年）はいずれも重要文化財に指定されている。
 - 妙立寺は日什上人が至徳 3 年(1386)に創立したという。
 - 曼陀羅寺は、元徳元年(1329)後醍醐天皇の勅願によって開かれたという。
 - 前掲、注 1）
 - 「静岡県指定文化財 応賀寺薬師堂保存修理工事報告書」（1992 年）
 - 当地方以外の近世仏堂で桁行 3 間虹梁を外陣に用いる仏堂は、管見では、和歌山県の青岸渡寺本堂（重文 天正 18 年/1590 九間堂）・兵庫県の一乗寺本堂（重文 寛永 5 年/1628 九間堂）・愛媛県の西林寺本堂（元禄 13 年/1700 五間堂）・三角寺本堂（嘉永 3 年/1850 三間堂）・新潟県の菅谷寺不動堂（明和 7 年/1770 五間堂）・滋賀県の大岡寺本堂（享保 13 年/1728 三間堂）の 6 棟である。重文を除く 4 棟は実測調査を実施。
 - 桁行 3 間虹梁を用いる外陣架構については、既に浅野清博士が指摘されておられる。（前掲、注 4）
 - 「国宝善水寺本堂修理工事報告書」（1976 年）
 - 「重要文化財新長谷寺本堂修理工事報告書」（1953 年）
 - 「重要文化財金剛證寺本堂修理工事報告書」（1994 年）
 - 「新編岡崎史 建造物 18」（市史編集委員会 1983 年）
 - 「重要文化財高田寺本堂修理工事報告書」（1954 年）
 - この種の遺構としては、長寿寺本堂（滋賀県：鎌倉前期）・善光寺本堂（大分県：建長 2 年/1250）・妙楽寺本堂（福井県：永仁 4 年/1296）・石手寺本堂（愛媛県：鎌倉後期）・弥勒寺本堂（兵庫県：康暦 2 年/1380）・浄光寺薬師堂（長野県：応永 15 年/1408）・円教寺大講堂（兵庫県：永享 12 年/1440）・浄厳院本堂（滋賀県：室町後期）がある。
 - 現在は、外陣内に後補の柱列を設け、内陣を前方へ 1 間拡張する改造がなされている。
 - 「日本建築史基礎資料集成七・仏堂Ⅳ」（1975 年・中央公論美術出版）
 - この種の仏堂の古例としては、霊山寺本堂（奈良県：弘安 6 年/1283）・愛宕念仏寺本堂（京都市：文保 2 年/1318）・室生寺本堂（奈良県：鎌倉後期）があるが、これらの外陣空間は小組格天井や折上小組格天井を張った繊細なもので、平安時代の邸宅系建築に類する意匠をもつ外陣であり、室町以降のこの種の仏堂とは異なる系統であるように思われる。
 - 「国宝興隆寺本堂修理工事報告書」（1998 年）
 - 「重要文化財西国寺金堂・三重塔修理工事報告書」（1967 年）
 - 「重要文化財観音寺金堂修理工事報告書」（1962 年）
 - 「重要文化財不動院本堂修理工事報告書」（1967 年）
 - 「重要文化財地蔵院本堂・鐘楼保存修理工事報告書」（1998 年）
 - 「重要文化財浄土寺阿弥陀堂・露滴庵及び中門修理工事報告書」（1970 年） 浄土寺阿弥陀堂の他には、石津寺本堂（滋賀県：延文 4 年/1359）・利生護国寺本堂（和歌山県：弘和元年/1381）・瑞花院本堂（奈良県：嘉吉 3 年/1443）・法界寺本堂（京都府：康正 2 年/1456）・本蓮寺本堂（岡山県：明応元年/1492）がある。
 - 「国宝長保寺本堂修理工事報告書」（1972 年）
 - 和歌山県には、長保寺本堂の他に松生院本堂（焼失・永仁 3 年/1295）・道成寺本堂（天授 4 年/1378）・瀬瀬神社大日堂（室町初期）が残る。高知県には竹林寺本堂（室町後期）と国分寺金堂（永禄元年/1558）が残る。福井県には中山寺本堂（室町前期）が残る。
 - 「重要文化財大恩寺念仏堂修理工事報告書」（1953 年） 大恩寺念仏堂は、平成 6 年 8 月 9 日火災により焼失。
 - この種の中世仏堂には、長福寺本堂（奈良県：鎌倉末）・勝常寺本堂（福島県：室町時代）・地藏院本堂（栃木県：天文 11 年/1542）・青蓮寺阿弥陀堂（熊本県：天文 11 年/1542）がある。
 - 安井四郎『官匠宮大工 岡田五左衛門 所蔵 古文書抜粋 目録』（私家版：1988 年） この他にも、仲金風『嵩山獅子正宗禅寺誌』（臨済宗正宗寺：1981 年）・『重要文化財三明寺塔婆修理工事報告書』（1951 年）・『重要文化財東観音寺多宝塔修理工事報告書』（1959 年）に岡田大工に関する記載がある。

（2001 年 5 月 9 日原稿受理、2001 年 9 月 17 日採用決定）